

広告

企画・制作 LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

宮崎の日差しで育てた藍のカスタムシャツ

平原 公喜 宮崎 / 染色家

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」(主催: LEXUS)は、日本各地で地域の独自性や伝統技術を生かして新しいモノづくりを挑む「匠」を応援する。

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援

本プロジェクトは2016年、プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけ、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、生駒芳子氏(ファッション・ジャーナリスト)・アート・プロデューサー、下川一哉氏(意匠研究所)らをサポートメンバーに発足。以来、全国の若き匠の挑戦が刻まれたプロダクトは、ふるさと納税の返礼品への指定やロックフェラー家主催のチャリティイベントへの出品、上海での国際的な展示会への出品など、目覚ましい活躍を見せている。

3年目となった今回は、全国47都道府県から計30名の若き匠が選出。昨年度、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを経て、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトの制作に取り組んだ。

1月24日、東京ミッドタウン日比谷で行われた発表会では、国内外の百貨店・セレクトショップバイヤー・メディア・デザイナー関係者などに向けて自身のプロダクトをプレゼンテーション。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなる大きなチャンスを手にした。



1月24日、プレゼンテーションにて



作品をプレゼンする平原さん

また当日は、2019年の新たな取り組みとして、全国の匠と世界的クリエイター(コラボレーター)が、新たなプロダクトを制作するコラボレーションプログラムを発表。コラボレーターである隈研吾氏(建築家)、廣川玉枝氏(SOMAR TA クリエイティブディレクター)、森永邦彦氏(ANREAL A L A G E / 代表取締役社長・デザイナー)、辰野しずか氏(クリエイティブディレクター) / プロダクトデザイナー)が登場し、想いを語った。2019年秋頃には、完成したコラボ作品、過去のプロジェクトから生まれた匠たちの作品を披露するイベントを京都の地で開催することを



商談会の様子

合わせて発表。プロジェクトも一歩一歩進化している。「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。

「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。

LEXUSが掲げる「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。宮崎県選出の匠、染色家の平原公喜さんのモノづくりへかける思いと完成した作品を紹介する。

藍染めから入り 洋服作りを学ぶ

「モノづくりにゴールはない。このプロジェクトに参加することで新しい挑戦をしたい」。藍染めを始めて約20年を迎えた三股町の平原公喜さんが名乗りを上げた理由だ。兄の影響や小学校の同級生の家が洋服店だったことがきっかけで、洋服好きに。専門学校卒業後、兄の紹介で徳島県の製藍師に弟子入り。沖縄県でも修業した後、23歳で日照時間が長く藍栽培に適している故郷宮崎に戻った。



平原さんの作業風景

バイト代ほとんどを農機具や資材につき込みながら、染料や染めたTシャツの販売を徐々に拡大。30歳ごろには県内の縫製工場経営者と出会い、稼動していない日曜日に工場を使わせてもらえることに。2年間、週末ごとに泊まり込むなどして、ミシン操作や裁断を勉強。洋服作りの技術を身に付けた。生地から1人で藍染め製品を作りあげら

襟と胸元着せ替え 遊び心楽しめる

半年の試行錯誤を重ね、たどり着いたのが、ボタンで留めめる藍染めの襟とポケットトフラップを交換でき、自分好みに「カスタム」できるカスタムカラーシャツだ。基本は伝統的な形の白いシャツのため着る場面を選ばないが、襟と胸元をパッチワーク柄や水玉模様の藍染めに着せ替えることで、遊び心を楽しめる。藍染め部分を外して洗えるメリットもある。平原さんの技術の集大成ともいえる作品となった。

10月のエリア・コンサルティングで説明を受けた下川氏は「使い手の視点に立って、着易さが追求されている。藍の世界を知ってほしい気持ち



エリア・コンサルティングの様子



完成プロダクト「カスタムカラーシャツ」

れるのが強みだ。プロジェクト始動となる6月のキックオフ・セッションでは「形が完成したシャツを染めるのではなく、シャツを染めることに染めて縫い合わせることで、新しいプロダクトができるのではないかと」アイデアを披露した。

下川氏と生駒氏は、平原さんがこれまでに手掛けた水玉

も伝わり、共感できる」と評価。プレゼンに向け、襟のパリエーションを増やすよう助言した。

男女兼用で、子ども用も展開。藍の種を付けて販売し、親子で着たり、藍を育てたりして、楽しんでもらうことも思い描いている。

平原さんは「襟が重要だったので、立体的に綺麗なカーブを描くように型紙の修正や素材選び、ミシンの調整を何度も行うなど、試作を繰り返した」と、仕上がりに満足そうな様子。

プレゼンを終え、今回の挑戦を振り返り「私や作品を知

らない人にも理解してもらえらるよういろいろと考えた。恥ずかしくないものを作りたい一心で、全く新しいライン

模様のシャツやバッグを手に取りながら「水玉はグラデーションをかけたたり、ランダムに配置したりして変化を持たせてみては」「シャツのフォルムを男女で変えてメリハリを持たせては」などとアドバイス。

いい面もあるが、作品作りに生かしたい」と意欲を見せた。下川氏の助言に加え「購入者に藍を育ててもらい、できた染料で一部を染めても良かったら面白いのでは」「袖にひもをつけて縛れるようにしようか」などアイデアを膨らませた。一方で、技術面や着易さを考慮してイメージを絞り込んでいった。

ナップを生み出すことができた。販売会で展示するのが楽しみ」と達成感を漂わせていた。



平原さんの作業風景

平原 公喜 宮崎 / 染色家

1976年、宮崎県都城市生まれ。藍の二大産地である徳島、沖縄県で学び、23歳で帰郷。持ち帰った種から藍を育て、現在は染料作りから服の縫製、染色までを1人で手掛ける。年間10回程県内外の百貨店やセレクトショップなどで個展、グループ展を開催。工房を構える三股町のふるさと納税返礼品にも採用されている。染色工房「LEVEL INDIGO」主宰。

LEXUS NEW TAKUMI PROJECT